
コミュニティを探して

(8)

藤 信子

7月の終わりから1週間ほど、集団精神療法の大きな学派の一つであるグループ・アナリシスの16th European Symposium in Group Analysisに参加するために、リスボンに行ってきた。

「7つの丘の街」とガイドブックに書いてあるリスボンを実感した日々だった。地図は平面図だけれど、「丘の街」を道路が走っているのだから、その道路と道路の間は坂道だったり、階段があったりして、地図で見ただけでは、

通りとその隣の通りとの関係がつかめないことに気が付いた。Symposiumの会場は、2つに分かれていて、毎日その2会場の間を朝と夕方に往復したのだけれど、平面図では、通りを隔てて向かいの建物に見えるその2つの建物

(学校)は、坂を上り小さな広場に出て、そこから坂を下るという行き方しかできないのだった。1日目に抄録集をわたされた私たちは、「横から行くとかないものかしら」と思ったが無理だ

った。「3次元」で理解しないと難しい街なのだ。そこの細い道をタクシーで走る時は、まるでジェットコースターの乗っている感じがした。だから丘の上の要塞跡のサン・ジョルジョ城から見る、オレンジの屋根の連なりの向こうに広がるテージョ川（海に見える）の眺めは、素晴らしかった。

リスボンは、坂と石畳の有名だと聞いていたので、長崎生まれの私は、それならなんとなく似ているのだろうと思っていただけ、そう簡単ではなかった。私の知っている石畳というのは、大きな柔らかな（と言いたくなる）石で出来ているのだけれど、リスボンのそれは、何と言う石なのか黄白色のような・灰色のようなツルツルの小さな石が敷き詰められていて、硬いのだ。友人とヒールのある靴では歩けないねと話していたが、そういう靴とか、底の薄い靴で平気なような人が歩いていて、ずっと靴を履いている人たちと私たち日本人とは、足の形とか機能が違うのかなと考えたものだった。

長崎で育つと、ポルトガル伝来のお菓子や料理などがあり、親しみやすいところだろうと思っていたが、グループで一緒だった北欧のメンバーから、海（やはりテージョ川のことをこう言いたくなるらしい）がありそして坂に

囲まれているところは、リスボンは長崎に似ていると言われた。川（海）と街の風景については、私も感じていたことだったし、それに、その人は京都にも来たことがあるということで、私が道の迷った話を分かってくれた。そのグループ（90分のグループが4日間続くプログラム）は、イスラエル、イギリス、ドイツ、スウェーデン、ポルトガル、イタリア、アメリカ、スペイン・・・と19人のメンバーだったので、育った街と住んでいる街を両方知っている人に出会い、ほっとした。こういうことが話が伝わる感覚なのだろうと、後からその感じについて考えた。日本で日本語でグループで話している時には、この頃は「伝わる」感じについては、これほど敏感ではないような気がする。英語、米語が母語と言う人は、メンバーの中でも5人ほどだったので、却って話しやすいことはあるが、「言いたいけれど・・・」「上手くことばになるだろうか・・・」と、思いながら話すことは、初期のグループ体験の訓練の頃を思い出した。外国に行かないと、初心に戻れないという事がいいのかは別問題だとしても、良い体験だった。

私が長崎生まれだと聞いた時、原爆の時には生まれていたら（失礼な）、

生まれたのは後かと聞かれた。両親が被爆者だというと、多くのメンバーが、ショックを受けたみたいだった。このグループでも、全体のグループでも、ガザの問題、ウクライナの問題などが、話の底流にありいろんな感情が出ていたけれど、そういうことと第二次世界大戦中のことは無関係ではないんだという感じだった。これはメンバーがグループ・アナリシスという、精神療法の中でも、個人だけでなく個人と社会との関係を見ている学派だからなのだろう。グループであったアメリカ人から、原爆について“Sorry”と言われて返事は一応「戦争のせいだ」ということを言ったが、後からも何度か考えたが被爆2世の一人として、ことばにするのは難しいことだと思った。その人には後で、あなたは私が今まであった原爆について謝った数少ないアメリカ人だ」と伝えた。彼は知り合った長崎出身の私との間で、わだかまりを持ちたくなかったのかも知れない。私としては、幸い父や母は無事だったけれど、育つ過程で知った近所の方々の色々な不幸を思うと、原爆投下ということは、許せない気持ちになる。ではそれはアメリカ人を許せないのかというと、それは違うような感じがする。原爆投下という事態に至った戦争・・・を考えると、

戦争を許せないというのは、誰を許せないということなのだろうか。このことは、ガザへのイスラエルの攻撃について、非難する声、何かできるのかという無力感、怒りなどが表出された全体のグループと重なって見える。国がすることについて、個人がどこまで責任を感じるかということだろうか。その責任を国民が感じるのが、民主主義（主権が国民にあること）なのだろうと思っている。現在の状況の中で、このことを考える場を与えてくれた、Group Analysis Societyという、そして集団精神療法について学び、考えるコミュニティに出会えて良かったと思っている。